No.6	提　案　名：「宮 Chil（ミヤチル）」育成プロジェクト	
	提案団体名：宇都宮共和大学 三浦ゼミ２年	
	所　　属：宇都宮共和大学 シティライフ学部 シティライフ学科	
	代　表　者：本橋 裕佳	指導教員：三浦 魁斗
メンバー	小野美空・菊地悠統・佐藤琉乃葉・早乙女裕紀・手塚千裕・本橋裕佳・宮澤愛子	

○　提案の要旨（図１を参照）

本提案は、都市圏への若年人口の流出抑制のために「郷土に関する子どもの学びや機会を支えられる場づくり」が宇都宮市（以下、「本市」）においても活発化する中、【地域の歴史・伝統文化・産業を「子ども主体」で体験できる機会】を「新たな価値」と捉え、共創的な場づくりを通じて、本市の児童生徒に対する「郷土への理解・愛着の醸成に資する活動機会の創出」という課題を解決することを目的としている。

本提案に関連する既存研究や本市における既存施策事業を整理したうえで、子どもを対象に、大谷石のクイズと工作体験を試験的に実施し、実際の活動やアンケート調査から実践的な知見を得た。以上を基に、地域の歴史・伝統文化・産業に関する活動への参加を経て郷土への深い理解と豊かな愛着が醸成された子ども（「宮 Chil」）を増やしていくために、住民のライフステージに応じて活動機会を支えられる場づくりを、大学・宇都宮市・事業者・地域住民等の共創により進める「宮 Chil（ミヤチル）育成プロジェクト」を提案する。

【 本提案の出発点】

若者に宇都宮市を選んでもらうには
「 地域への理解と愛着を子どもの頃から育む場」が必要では？

本提案に関連する既存研究を整理

「 体験活動へ参加した経験は子どもの精神的な成長に寄与しうる」結果が報告（文部科学省, 2021）

宇都宮市における既存施策事業を整理

小中学生を対象として、地域の歴史・文化・産業を体系的に学ぶ「 宇都宮学」が2021年度より実施

子どもを対象とした試験的事業の実施

「 大谷石を彩ろう ！大谷石クイズ＆クラフト 」の実施を通じて、施策事業の課題を捉えたとともに、参加児童・保護者へのアンケート 調査から施策事業の可能性を見出した

「 宮Chil（ ミ ヤチル） 」育成プロジェクト の提案

地域の歴史・ 伝統文化・ 産業に関する活動への参加を経て郷土への深い理解と豊かな愛着が醸成された子ども（「 宮chil（ミ ヤチル）」 ）を増やしていける場づくりを目指す。

図１　提案の要旨

１．提案の背景・目的

全国的な低出生率に加え、都市圏への若年人口の流出により人口減少が加速する地方圏においては、「どうしたら若年層に選ばれるまちになるのか？」という問いに対する解決策が求められている。その一つとして、子どもの頃から地域の歴史・伝統文化・産業に触れ、それらへの深い理解と豊かな愛着が醸成された人は、生まれ育った地域に住み続けたいという意識を持ちやすい [1]という知見をふまえ、「児童生徒に対する郷土への深い理解と豊かな愛着の醸成」のためのまちづくりが活発化している。

図２　スーパースマートシティのイメージ [2]

こうした状況の中、本市においても、2018 年策定の第 6 次宇都宮市総合計画 [2]において目標像として定めた「スーパースマートシティ（子どもから高齢者まで、誰もが豊かで便利に安心して暮らすことができ、夢や希望がかなうまち）」を構成する「3 つの社会」に、絆を深め共に支え合う「地域共生社会」を位置づけている（図 2）。このことから、地域の歴史・伝統文化・産業に関する子どもの学びや体験を支えられる「地域共生の場づくり」のためのプロジェクトに本市も積極的に取り組もうとしていることがわかる。ただし、こうした「児童生徒に対する郷土への理解・愛着の醸成に資する活動機会」を、本市が持続可能な形で支えていくために「いかなる共創のあり方がありえるか？」については、議論の余地を残していると言える*1。

以上をふまえ、本提案は、地域の歴史・伝統文化・産業に関する子どもの学びや体験を、大学・本市行政・事業者・地域住民等の共創により支えられる場づくりのためのプロジェクトを提案する。特に、地域住民に関しては、ライフステージに応じて本プロジェクトの企画・運営へ参加してもらえるような仕組みを設けることにより、子どもの学びや体験の機会を持続可能な形で支えていく。本プロジェクトによる活動機会を経て、郷土への深い理解と豊かな愛着が醸成された子ども「宮 Chil (ミヤチル)」を増やしていくことで、児童生徒に対する郷土への理解・愛着の醸成に資する活動機会の創出という課題を解決することを目的としている。

２．提案の目標・課題「まちに広がる共創の輪～新たな価値の創造を目指して～」との関連

本提案の目標は「本市が若年層に選ばれるまちとなること」であり、本提案を実現することで、「郷土への深い理解と豊かな愛着を子どもの頃から育んできた市民が、住み続けたいまちとして宇都宮を選んでもらえる状態」を創り上げたいと考えている。

また、本提案は「地域の歴史・伝統文化・産業に関する学びや体験を子ども主体で体験できる機会」を「新たな価値」として、その価値の創造を目指し、本市の子どもをターゲットに、〈大学〉〈本市行政〉〈大谷石採石業 / 宮染め / ゆず栽培等の事業者〉〈高校生や保護者といった多様な市民〉などが一体となり「共創の輪」をまちに広げようとしている点に、本課題「まちに広がる共創の輪～新たな価値の創造を目指して～」との関連性がある。

３．現状分析

3.1　本提案に関連する既存研究の整理

2021 年 9 月に文部科学省が発表した「令和 2 年度青少年の体験活動に関する調査研究結果報告（一例として図 3 を参照）」によると、小学生の頃に体験活動や読書、お手伝いを多くしていたこどもは、収入水準の多寡にかかわらず、その後、高校生の時に自尊感情や外向性、精神的な回復力といった項目の得点が高くなる傾向があるということがわかった [3]。この調査研究は、「21 世紀出生児縦断調査」の調査データを活用し「体験」と「意識等」との関係性、影響や効果について分析したものである。文部科学省のこの調査研究によって、これまで直感的に捉えられてきた「体験活動は、子どもの成長にとって大切な要素だ」という感覚を、確かな分析方法により裏付けることができたと言えるだろう。上記資料においても、「こどもの健やかな成長を確かなものにするには、多様な『体験』の場や機会を作っていく必要がある」とある。

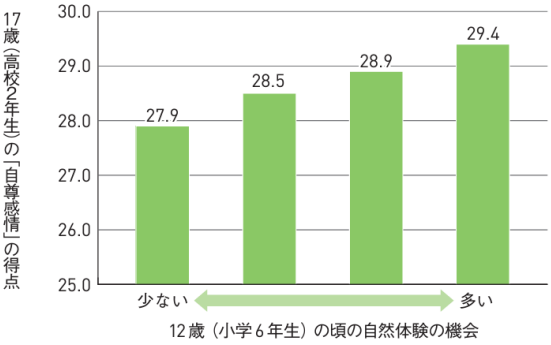

図 3 自然体験の機会と自尊感情の関係 [3]

3.2　本市における既存施策事業の整理

「地域への理解と愛着を子供の頃から育む場」という観点で本市の既存施策事業を整理すると、2021 年度より小中学生を対象に実施している「宇都宮学」が、本提案と強い関連を持つだろう。「宇都宮学」は、グローバル社会に主体的に向き合い、よりよい社会を創る担い手となるとともに、異なる文化をもつ人々とともにたくましく未来を生き抜く宮っこを育むための学習プログラムである[4]。「宇都宮学」では、児童生徒が地域の歴史・伝統文化・産業などについて、体系的な学習を行うことを通して、郷土への愛情や誇りをもち、よりよい社会を創る担い手となるとともに、未来に向かって主体的に生きていくための資質・能力を育成することを目指している。

「宇都宮学」の理念をふまえ本提案は、本市の文化や産業を「見て・聞いて・触れて・考える」体験活動の提供を通じて、本市への理解と愛着を子どもに促すことに重点を置くこととした。

3.3　本提案に向けた事業の試験的実施および活動報告

3.1, 3.2 をふまえ本提案への実践的な知見を得るために、本市の子どもを対象とし、地域の歴史・伝統文化・産業の学びや体験に関するイベントを企画・主催したとともに、参加者へのアンケート調査を実施し事業効果を把握した。

(1)　「大谷石を彩ろう！」事業の企画

表 1 にイベントの概要を記す。本イベントでは、地域の歴史・伝統文化・産業の学びや体験の機会として、大谷石に関するワークショップを実施した。これには、指導教員の三浦魁斗専任講師が大谷石を研究テーマの一つとしていることや、宇都宮共和大学による合宿交流研修の見学地が大谷資料館だったこと、大谷石について詳しくはよく知らないというゼミメンバーもいたことなどが背景にある。イベントの内容は大谷石に関するクイズと大谷石を使った工作体験である。日時は 2024 年 11 月 3 日の 13:00~16:00 とし、会場は「若者まちなか活動・交流センター」内のホールと研修室を借りた。参加費は無料であり、参加希望者には図 4 のチラシの QR コードより専用の Google フォームにて申込いただいた。会場周辺在住の小学校 5・6 年生約 20 名を対象者として想定したため、東小学校・東地区コミュニティセンター・西小学校・西地区コミュニティセンター・中央小学校・中央小学校コミュニティセンター・昭和小学校学童保育所・簗瀬地区コミュニティセンターを訪れ、チラシの施設内設置・児童配布にご協力いただいた。また、宇都宮市役所を訪れ、市政研究センターや大谷振興室にもイベントの宣伝にご協力いただいた。加えて、下野新聞にも取材いただき、新聞記事にしていただけた。そのほか、梁瀬小学校で開催された「霜月祭り」や共和大学宇都宮シティキャンパスで開催された「すみれ祭」においてもチラシを設置し、来場者への宣伝に取組んだ。

表 1 イベント事業の概要

内容	大谷石を利用したワークショップ （大谷石クイズ・大谷石クラフト）
日時	11 月 03 日(日)　13:00～16:00
会場	若者まちなか活動・交流センター （〒320-0026 宇都宮市馬場通り 1 丁目 1-1）
対象者	小学校高学年(会場周辺在住の小学校 5・6 年生約 20 名を想定)
スタッフ	2 年三浦ゼミの学生 10 名ほか 教員 1 名
備考	参加費無料・チラシの QR コードから専用フォームにて申込可能

図 4 作成したイベント告知用チラシ

周知の結果、9 組の児童・保護者が申し込み、当日は 11 名の児童・6 名の保護者にお集まりいただけた。表 2 に、参加者の概要を記す[*2]。

表 2　参加者の概要[*2]

学校名	学年	参加のきっかけ
東小学校	１年	チラシを見て
東小学校	１年	チラシを見て
東小学校	１年	チラシを見て
東小学校	２年	チラシを見て
東小学校	２年	チラシを見て
簗瀬小学校	２年	チラシを見て
昭和小学校	３年	知人・友人を通して
東小学校	３年	チラシを見て
東小学校	３年	チラシを見て
東小学校	３年	チラシを見て
東小学校	３年	知人・友人を通して
東小学校	４年	チラシを見て
東小学校	５年	チラシを見て
芳賀中学校	２年	知人・友人を通して
芳賀中学校	２年	知人・友人を通して

(2)　「大谷石クイズ」

イベントでの学びの機会として「大谷石クイズ（図 5 を参照）」では、子どもと保護者が一緒に遊びながら、楽しみつつ、大谷石への理解を深めてもらうことを目的とし、〇×形式のクイズを作成した。まず、大谷石が「約 2000 万年前に噴出された火山灰でできていること」「建物・塀・オブジェなど宇都宮市内の様々な用途に使われていること」を説明した。次いで、「大谷石の黒い部分の名前はミソである（正解は〇）」「大谷石には光る機能がある（正解は×）」「大谷石は 300℃まで耐えられる（正解は×）」「大谷石が使われている旧帝国ホテルはスティーブ・ジョブズが建てた（正解は×）」「JR 宇都宮駅には大谷石造りの餃子像がある（正解は〇）」という全 5 問のクイズを出題した。参加者には用意したエリアに移動してもらった後、司会が正解を発表し、それぞれ解説を行った。

大谷石について最初はよく知らないと言っていた子どもも、保護者の方と楽しみながら学んでいる様子が見られた（写真 1）。子どもの興味をそそるような問題となるようクイズを工夫したことで、「絶対違うよ～！」「こっちだよ！」という声が実際に聞けた。また、子どもたちが自ら考え、気づき、そして回答している場面を見て、大谷石への理解を深めている様子が確認された。

(3)　「大谷石クラフト」

次に、イベントでの体験の機会として「大谷石クラフト」を企画した。「大谷石クラフト」では、大谷石の端材をボンドで組み合わせ形を作り、その作品にマジックペン・モール・ビーズ・リボンなどの装飾品を使い工作（図工）をしていった。子どもたちが自身で考え、作りたいもの、書きたいものなどを想像し楽しみながら工作するイベントとなるよう企画した。

図 5 「大谷石クイズ」の抜粋

写真 1 「大谷石クイズ」の様子

写真 2 「大谷石クラフト」の様子

写真 3 「大谷石クラフト」の作品

写真 2・3 には、「大谷石クラフト」の工作中の様子と、実際に参加者が完成させた作品の一例を示す。我々ゼミメンバーも子ども達と一緒にクラフトをして楽しむことができた。子どもの楽しむ様子が確認できただけでなく、初対面の参加者同士で足りない端材や装飾品などを貸し借りしている子どもが見られ、イベントにより協調性や積極性が育まれることがあると気付かされた。

(4) 参加者へのアンケート調査の概要および集計結果

本イベントの終了時に、参加者の感想・意見を把握するため、アンケート調査を実施した。回答者は保護者 6 名、子ども 11 名の計 17 名である（回収率 100.0%）。調査票では、子どもに対して「大谷石クイズ・大谷石クラフトの満足度」「本イベントの感想」「大谷石の特徴・歴史の理解度」「本市への関心度」「次回イベントへの参加意向」「次回イベントで体験したい内容」といった質問項目を、保護者に対しては「本イベントの満足度とその理由」「本イベントへの感想」「次回イベントへの参加意向」「次回イベントへの協力意向」といった質問項目を尋ねた。

表 3 に、「参加児童による大谷石クイズ・大谷石クラフトの満足度」の集計結果を記す。表 3 からは、大谷石クイズに関して「とても楽しかった」が 6 人、「まあまあ楽しかった」が 3 人、大谷石クラフトに関しては「とても楽しかった」が 11 人という結果がみられた。参加児童は全体的にとても満足しているという結果が見て取れ、本イベントが好評だったことが確認できた。表 4 に、「参加児童による大谷石への理解度・本市への関心度」の集計結果を記す。表 4 からは、大谷石の特徴・歴史への理解度に関しては「とても知れた」が 5 人、「まあまあ知れた」が 4 人、「どちらでもない」が 2 人であり、本市への関心度に関しては「とても知りたい」が 8 人、「まあまあ知りたい」が 2 人、「どちらでもない」が 1 人という結果が示された。大谷石を介した本イベントによって、郷土や歴史について児童が楽しく考え、知識をつけられたと感じられた。表 5 に、「参加児童・保護者による次回イベントへの参加意向」の集計結果を記す。表 5 からは、参加児童については「とても行きたい」が 10 人、「まあまあ行きたい」が 1 人、保護者については「とても行きたい」が 2 人、「まあまあ行きたい」が 4 人という結果がみられた。また、表 6 の「保護者による次回イベントへの協力意向」からは「とてもそう思う」が 1 人、「ややそう思う」が 4 人、「どちらでもない」が 1 人という結果であり、子ども・保護者とも次回イベントの参加・協力に前向きな意見だということが確認できた。表 7 に、「参加児童による次回イベントでの体験希望内容」を記す。本イベントで大谷石を用いたように、本市の歴史・伝統文化・産業に関してどのようなイベントが好まれるかを複数回答で集計した。表 7 からは、「宮染め」「黄ぶなの絵付け」「しもつかれ作り」「ゆず料理」がい

表 3　大谷石クイズ・大谷石クラフトの満足度

質問項目	大谷石クイズ	大谷石クラフト
とても楽しかった	6	11
まあまあ楽しかった	3	0
ふつうだった	0	0
あまり楽しくなかった	0	0
全然楽しくなかった	0	0
無回答	2	0

表 4　大谷石への理解度・本市への関心度

質問項目	理解	関心
とても知れた / 知りたい	5	8
まあまあ知れた / 知りたい	4	2
どちらでもない	2	1
あまり知れなかった / 知りたくない	0	0
全然知れなかった / 知りたくない	0	0

表 5　次回イベントへの参加意向

質問項目	児童	保護者
とても行きたい	10	2
まあまあ行きたい	1	4
どちらでもない	0	0
あまり行きたくない	0	0
全然行きたくない	0	0

表 6　次回イベントへの協力意向

質問項目	回答数
とてもそう思う	1
まあそう思う	4
どちらでもない	1
あまりそう思わない	0
全くそう思わない	0

表 7　次回イベントで体験したい内容

質問項目	回答数
宮染め	4
黄ブナの絵付け	4
しもつかれ作り	4
ゆず料理	4
大谷石の細工	3

表 8　保護者による本イベントへの満足度とその理由*3

満足度	その理由
とても満足	家では活用できない材料を使うことができ子どもの意欲が感じられる取り組みでした。 地元の石である事を子どもの意識につながりました
とても満足	大谷石について色々知る事ができました。 また子ども達と久しぶりに工作を楽しむ事ができました。
とても満足	クイズもおもしろかったし、クラフトもすごく良い経験になりました。 楽しく創作活動を行えました！
やや満足	案内がスムーズだったら”とても満足”です
やや満足	なし
やや満足	なし

表 9　参加児童・保護者による本イベントへの感想

参加児童	保護者
めちゃくちゃめっっっっっっっっっっっっっっっっっっっ っちゃくちゃ楽しかった！！	家では活用できない材料を使うことができ 子どもの意欲を感じられるイベントでした。
大谷石の特徴を知り作品を作れてとても楽しかった。	大谷石について色々知る事ができ、 子ども達と久しぶりに工作を楽しむことができた。
また参加したいです。 大谷石の歴史をもっと知りたいです。	今回の体験でより理解が深まりました。 楽しみながら学ぶことが出来ました。
キャンドル入れを作れて良かった。 クイズで大谷石のことを知れた	日々大変ですが、仕事を忘れて 楽しむことが出来ました。
みんなと一緒に遊べて楽しかった！	なし
大谷石が色々な所に使われてて驚いた。	なし
クイズも楽しかった。	なし
楽しかった！！　（２名分）	なし
とても楽しかった。	なし

ずれも 4 人、「大谷石細工」が 3 人に選ばれ、どのイベントも等しく参加したいという意見が見られた。「大谷石細工」が選ばれていることで、本イベントの成功が改めて感じられた。また、他のイベントへのニーズも確認できたため、多くの子どもが地域の歴史・伝統文化・産業を学び、体験できる場を提供できないかと痛感した。表 8 には、「保護者による本イベントの満足度とその理由」の集計結果を記す。表 8 では「とても満足」が 3 人、「やや満足」が 3 人という結果が示された。回答の理由としては、「地元の石である事を子どもの意識につながった」「子ども達と久しぶりに工作を楽しむ事ができた」などの意見が得られた*3。表 9 に、「参加児童・保護者による本イベントの感想」の集計結果を記す。参加児童からは「さらに大谷石について学んでいきたい」「自分自身で好きな作品を作ることが出来て楽しかった」などという感想が、保護者からは「作品を見るたびに今回のイベントのことを思いだせる」などという感想がそれぞれ得られた。

４．施策事業の提案

4.1　「宮 Chil（ミヤチル)育成プロジェクト」の提案

3 章での現状分析をふまえ、本提案では「宮 Chil（ミヤチル）育成プロジェクト」という施策事業を提案する。本施策事業は、地方圏における若年人口の流出を抑えるために子どもへの郷土愛の醸成を目的とする取組が全国的に高まりを見せる中で、本市児童生徒への地域の歴史・伝統文化・産業への理解を促す「宇都宮学」をさらに発展させ、「本市の子どもへ深い理解・豊かな愛着を醸成させるような学びや体験の機会を創出する場づくり」を実施するものである。地域の歴史・伝統文化・産業に関する学びや体験の機会への参加を経て郷土への深い理解と豊かな愛着が醸成された子ども（「宮 Chil」）を増やしていくために、子どもに活動機会を提供し、そしてライフステージごとに市民を巻き込み学びや体験の機会を支え合う場づくりを、大学・宇都宮市・事業者・地域住民等の共創により進めることとする（図 6 を参照)。以下に、本市における住民のライフステージに応じた「宮 Chil（ミヤチル）育成プロジェクト」への関わり方を記す。

(1)　小・中学生：イベントの参加者

本市の小中学生に対しては、地域の歴史・伝統文化・産業に関する学びや体験のイベントへの参加を促す。例えば、今回開催したイベント事業である「大谷石クラフト」のほか、アンケート調査によりニーズが見出された「宮染め体験」「黄ぶなの絵付け」「しもつかれ作り」「ゆず料理」など、本市の歴史・伝統文化・産業に触れる機会を提供する。これにより、地域の歴史・伝統文化・産業に関する初歩的な興味を引き出し、郷土への愛着を育むことにつながりうる。

(2)　高校生：イベントの企画主体として連携

本市の高校生に対しては、本プロジェクトの一環でイベントの企画段階に関与する機会を提供する。対象層である小中学生と近い年代ならではの視点で、地域にふさわしい新しい体験イベントやワークショップの提案・企画に関して協働する。これにより、自主的に地域資源を活用する力を身につけ、地域への責任感や宇都宮市民である意識を育てうる。また、地域の事業者や大学生と協働することで、社会における実践的なスキルアップも期待できる。

(3)　大学生：イベントの運営主体として連携

本市の大学生は、実際にイベントやプロジェクトの運営に携わる役割を想定している。大学で得た知識とアイデアを活用し、本市と連携してプロジェクトの運営に関わりながら、地域貢献をしていく。運営の中心となる大学生にとっては、リーダーシップのスキルを磨き、同時に地域への深い理解と豊かな愛着を実践的に発展させる機会となると考えられる。

(4)　社会人：イベントの応援コミュニティ

本イベントへの参加・企画・運営に携わった彼ら・彼女らには、地域への深い理解と豊かな愛着が育まれたことにより、本市にそのまま定住し地元の企業などに就職することが期待される。今までの学びや体験の経験を活かして、地元の一員としてイベントやプロジェクトへ支援してもらうため連携する。具体的には、地域イベントの情報の周知や運営のサポートなど、本市で次世代の若者たちを支援する機会を設ける。

(5)　子育て世帯：イベントの応援コミュニティ・子どもの参加を促す

かつて本イベントに参加した市民が親となった後は、引き続き本市で住み続けてもらいながら、自分の子どもに本プロジェクトへの参加を促し、活動の様子を見守る立場に立つ。親として地域との繋がりを深め、家族ぐるみで地域への愛着を持ち続けられるように支援する。親世代が見守ることで、プロジェクトの活動全体に対する地域の信頼感も高まり、世代を越えた郷土愛の醸成が進むのではないかと考える。

4.2　施策事業を提案する際の関係主体の役割

本施策事業の実施においては、主に「大学」「宇都宮市」「大谷石採石業 / 宮染め / ゆず栽培等の事業者」「高校生 / 大学生等による運営コミュニティ」「子育て世帯 / 自治会等による応援コミュニティ」などとの共創が不可欠である（図 6）。本プロジェクトは本提案団体である「宇都宮共和大学シティライフ学部三浦ゼミ 2 年」を中心とした組織を立ち上げ、「市内大学」と連携の下で企画・運営を行う。「本市行政」には、活動場所やイベント PR の支援について連携する。地域の歴史・文化・産業と関わる「事業者」には、材料・情報・等の提供に関して連携する。例えば、大谷石の採石業者にはイベントに使用する大谷石の端材の提供を、宮染めの職人には染色体験の指導を依頼し、「体験」を重視したイベントを成功させるための知識や技術を本提案団体と共有する。そのほか、小中学校やコミュニティセンターとは本イベントの PR について、下野新聞・宮ラジ・栃ナビといった各社メディアとは本イベントに関する情報の共有について、それぞれ連携することが考えられる。

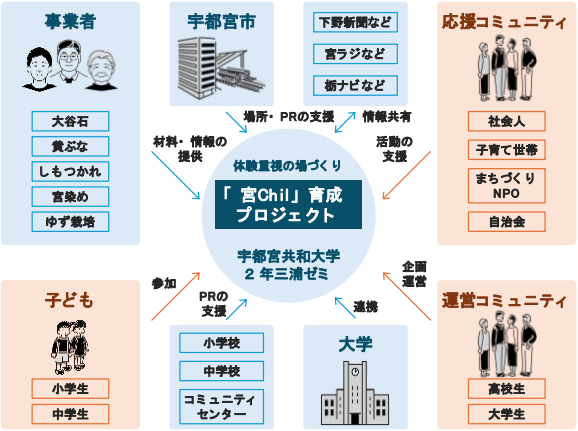

図 6　本提案による「共創の輪」のイメージ

4.3　施策事業に伴う効果

「市内大学」には、宣伝効果がある。本プロジェクトを通じて「市内大学」の地域貢献活動としての評価が高まるうえ、所属学生にとっても地域と実際に関わったり実践的な地域活動を行ったりすることで、地元に就職する若者の増加が期待できる。「本市行政」は、本提案の目標でもある若年人口の市外流出抑制につながることが期待されるだろう。子どもの頃から地域資源や地元の歴史・文化に触れることで郷土愛が醸成され、その結果、若者が本市に定住することで人口減少の緩和が期待される。さらには、次のまちづくりを担う世代の育成が進むことも考えられる。「事業者」は、地域資源を活用したイベントに参加することで地域産業の知名度の向上や地域資源に対する新たな需要を見出し新たな事業の可能性が生まれる可能性がある。また、地域イベントを通じて宇都宮の歴史・文化・産業を次世代に継承する担い手を見つける機会が得られる。

4.4　施策事業遂行上の問題点

「市内大学」に関しては、持続可能性の確保が最大の課題となる。例えば、プロジェクト継続のために、補助金や寄付金に頼りすぎない活動資金の調達・長期的な運営計画の策定が必要である。また、参加者集客の難しさも課題の一つである。今回実施した「大谷石を利用したワークショップ」では、開催日時が餃子まつりや三連休と重なった影響もあり、ゼミメンバーの知人にも声をかけ積極的に周知したものの、イベント開催間近でも参加者がなかなか集まらなかった。「本市行政」からみた場合、複数の部署がプロジェクトに関わることが予想されるので、それらの部署と企画運営を行う大学の連携が取ることができるかが課題である。また、プロジェクトを長期的に運営する際に、担当者間での引き継ぎが不十分であるとプロジェクトの継続に支障をきたす可能性があることも問題点の 1 つといえる。「事業者」からみた場合、プロジェクトに協力する際の時間やコストの負担が課題となる可能性がある。そのためプロジェクトに参加するメリットを明確化し、事業者が長期的に協力しやすい体制を整える努力が必要である。最後に、「地域住民」からみると、プロジェクトに対する認知度の低さが問題としてあるため、知名度向上のために地道な広報活動などが必要であると考える。

以上のように、関係主体ごとに考えられうる問題点を挙げたが、これらを解決することが本提案「宮 Chil（ミヤチル）育成プロジェクト」の成功につながり、かつ、本プロジェクトの持続可能性を高める鍵となる。多様な関係主体が連携し、それぞれの役割を果たすことで、本提案を通じて地域全体が一体となり、次世代へとつながる郷土愛と共創の輪を広げていくことができる。

本提案が宇都宮の未来を担う子ども達の成長の支えとなることを願う。

【補注】

*1 本提案募集要項における「(2) 課題の説明」にある記載からも見て取れる。
*2 体調不良等により 3 組の児童が欠席した。また、知人・友人を通して中学生が本イベントに申し込み、参加者に空きがあったため参加していただいた。
*3 「満足度の理由」については、自由記載のため「無回答」だった欄がある。

【参考文献】

1) 文化庁 ： 文化を大切にする社会の構築について ： 一人一人が心豊かに生きる社会を目指して, 文化審議会, 2002 年.
2) 宇都宮市 ： 第 6 次宇都宮市総合計画改定基本計画（後期基本計画）, 宇都宮市, 2023 年.
3) 文部科学省 ： 令和 2 年度 青少年の体験活動に関する調査研究 報告書(本文), 文部科学省, 2020 年.
4) 宇都宮市 ： 宇都宮学, https://www.city.utsunomiya.lg.jp/kosodate/gakko/1012029/1023188.html, 2024 年. (2024 年 11 月 19 日閲覧)